

厳密なプロセスにもとづいた質的研究を行うための提言

方法論の概念整理と研究のデザイン・評価

セバタ カツユキ ササキ タケン
瀬 皇 克之* 佐々木 健^{2*}

Key words : 質的研究, 概念, 方法論, 質, 厳密性

I はじめに

人間の健康に関わる諸活動をあつかう保健医療研究では、数値では正確に表現・評価できない事象を研究対象とすることが少なくない¹⁾。質的研究は言葉や現象、あるいは文字記録などを通じて分析・考察する方法論として知られ²⁾、これまで量的研究が主流だった保健医療の分野でも徐々にその存在が知られるようになってきている。しかし、質的研究の概念は依然として混乱しており、これが質的研究に対する疑義や方法論の誤謬をもたらす原因にもなっている³⁾。これまでのふたつの拙論^{4,5)}では、質的研究の背景を紹介するとともに、質的研究に向けられた疑義や解決すべき課題を概説した。本稿は混乱した質的研究の概念を整理する分類を提案し、公衆衛生分野において厳密なプロセスにもとづく質的研究を行うための具体的な方法論に関する提言を行った。

II 質的研究の概念の整理

1. 研究の特長を整理する分類の提案 (図1)

質的研究はさまざまな変遷を経て発達したため、現在、多様な概念や背景を有する研究が行われている。そして、帰納のプロセスをもちいて質的データから“一般化理論”を抽出しようとする Grounded theory approach⁶⁾、観察や面接あるいは資料などから社会的事象に潜在化する“文化”を記述しようとする Ethnography⁶⁾、さらにひと

の主観を通じて日常生活におけるさまざまな経験の“意味”の記述を目指す Phenomenology⁶⁾などの古典的な方法論が紹介されている^{7,8)}。

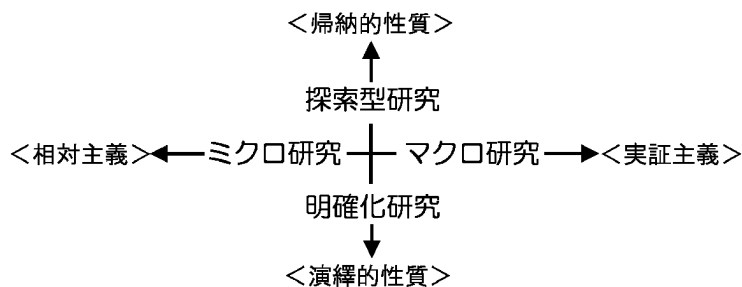
しかし、これらの分類はその方法論が持つ視点(視座)に基づいたものであり、一般性の有無や主観性の影響といった科学研究としての要件に関わる要素を考え、厳密な研究を行うための指標とはなりにくい。そこで、計画している質的研究の特長を振り返り、厳密なデザインを考える際の指標となる新たな分類を提案したい。この分類は質的研究を“研究の目的”によって整理するものであり、研究対象となる事象に潜在化している要素を調べる研究を「探索型研究」、また、あらかじめ設定した研究の枠組みを利用しながら仮説をより明確なものにしていく研究を「明確化研究」とするものである。こうした分類によって、計画している研究が何を目的とし、質的情報をどのように収集すればいいのかを事前に振り返る際に役立つ。

また、この分類は研究プロセスの性質を理解する場合にも有用である。質的研究は一般的に帰納的なプロセスをとるとされている。すなわち、あらかじめ仮説や予断を持たずに調査を進め、その調査を通じてはじめて仮説がみいだされる探索型研究ではそのプロセスは帰納的なものである。しかし、すでに行われた調査の結果を新たな research question として想定する研究や PRECEDE-PROCEED Model⁹⁾の枠組みをもちいて地域住民の健康ニーズを抽出する試み¹⁰⁾、あるいはモデリングや模倣による学習がひとの認知的要因に影響をあたえると考える社会的認知理論¹¹⁾の枠組みにしたがった研究¹²⁾などは、より演繹的なプロセス

* 南小樽病院, 北海道大学大学院医学研究科

^{2*} 北海道苫小牧保健所
連絡先: 〒047-0002 北海道小樽市潮見台1-5-3
南小樽病院 瀬皇克之

図1 質的研究の分類



- マイクロ研究・・・研究対象の個別性や特異性を尊重する
- マクロ研究・・・得られた結果の一般性や普遍性を重視する
- 探索型研究・・・あらかじめ予断をもたずに研究対象を探索する
- 明確化研究・・・分析の枠組みなどを利用して課題を明確にする

によって問題点を明らかにしようとする明確化研究だともいえる。このように研究を目的別に分類すると質的研究のプロセスは単に帰納的なものとしてまとめることはできず、その目的に応じて帰納的なものから演繹的なものまでさまざまなプロセスをとりうるということが理解できる。

一方、筆者はこれまでの拙論⁴⁾にて、質的研究をマクロ研究とマイクロ研究といった“研究の方向性”によってわけて理解することを提案した。この分類は、マクロ研究が一般性や普遍性といった実証主義に基づいた概念を重視しているのに対して、マイクロ研究は“研究者個人の視点”を尊重したり、調査結果の個別性・特異性を重視する相対主義的な概念を持っていることを考慮したものである。したがって、これから行おうとしている研究がこのマクロ・マイクロのいずれの分類に属するものかを考えることによって、研究の妥当性を高めるために必要な要件を整理し、厳密な研究プロセスをデザインすることが容易になる。

このように、探索型・明確化型といった分類やマクロ・マイクロといった分類は、質的研究の概念を整理し、計画している研究の特長と妥当性を向上させる要件を考える際の指標として活用することができる。

2. 質的研究に求められる「説明可能性」

質的研究ではデータの収集やその分析に人の主観が影響する¹³⁾ため、合目的にデータを収集したり、妥当性の高い分析を行うことが重要である¹⁴⁾。しかし、質的研究ではこれらのプロセスが厳密に行われたかどうかを第三者が確認すること

が難しく¹⁵⁾、データ収集のプロセスや分析結果を導いた経緯を詳細に報告して研究の「質」が担保されていることを提示したり、複数の研究者による合意形成を重視した分析プロセスによって「質」を確保しようとすることが多い⁵⁾。これらはいずれも研究としての妥当性を主張できるような説得力（以下、「説明可能性」）を高めるための工夫であるが、質的研究をデザインする際には厳密性を有する研究プロセスや説明可能性の高い報告が可能になるよう細心の注意を払わなければならない。

しかし、先にも述べたように質的研究にはさまざまな形態があり、その研究がどのような目的や方向性をもっているかによって説明可能性を高めるための要件も異なる。例えば、研究結果に一般性や普遍性が必要となるマクロ研究を評価する場合には実証主義的な説明が求められるのに対して、限られたケースを深く掘り下げて考察するマイクロ研究ではデータ収集から分析、さらには考察にいたる研究プロセス全般に関する詳細な記述が重視される。したがって、現在、多様な手法がもちいられている質的研究においては「説明可能性」という観点から従来の評価基準を整理し、各研究の目的と性質にふさわしい「質」の評価が行えるよう整備しなければならない。

III 質的研究の「質」に関する提言

1. 「質」の高いデザインとは

質的研究はその研究がどのような性質を持つかによって妥当性を担保するための要件が異なる。すなわち、一般性や普遍性といった実証主義的な

要件を優先するのか、それとも個性や特異性といった相対主義的な価値観を優先するのかはそれぞれの研究の性質による。したがって、質的研究をデザインする場合、その研究がどのような目的と方向性をもっているのかを明確にし、その研究の性質にふさわしく、かつ、妥当性が担保される厳密なプロセスで構成することが重要である。その際には先にも述べたようなマクロ・ミクロの分類あるいは探索型・明確化型の分類を参考に、これから行おうとしている研究がどのような性質を持っているのかを詳細に振り返ることが肝要である。

また、質的研究では統計学的調査のようにその「質」を“客観的”に評価できない。そこで、被調査者に収集したデータを開示してその確からしさを確認する member checking を行ったり、audit trail などのようにデータの収集および分析・考察のプロセスを詳細に提示して第三者にその妥当性を評価させて「質」の確保をはかるべきだとされている^{16,17)}。しかし、質的分析で行われる質的データの抽象化作業の適切性を、研究に参加していない、あるいは一部にしか参加していない第三者は正しく評価できるとは限らないとする意見^{18~20)}がある。したがって、従来から推奨されてきた研究結果の事後評価だけでなく、明解で合理的なプロセスの設計や説明可能性の高い報告書の作成に向けての周到な事前準備が量的研究にも増してよりいっそう求められる²¹⁾。

特にマクロ研究は一般性や普遍性を無視できないため、複数の研究者間の合意を基調とした分析プロセスを設定したり、学際的な研究グループをつくって共同研究を強化するなど合理性を重視したデザインを心がけなければならない。一方、ミクロ研究は“研究者個人の視点”を尊重した分析が許容されるが、マクロ研究以上に研究プロセスや分析結果の妥当性を第三者が評価できるよう詳細な報告をしなければならない。このように、研究者の主観が適切に執行されていることを第三者に提示できるよう、研究の目的や方向性にふさわしいデザインを検討しておくことが質的研究では重要である(表1)。

2. 「質」の評価基準に関する私案

質的研究の「質」を評価する基準は、研究者と評価者が共有できる合理的なもの¹³⁾であると同時

表1 研究プロセスの厳密性を高めるための工夫

	マクロ研究	ミクロ研究
明解で合理的だと判断できるプロセスの設定	◎	◎
説明可能性の高い報告書の作成	◎	◎
データと考察結果との明確な区別	○	○
学際的な共同研究の強化	○	△
複数の研究者による“合意形成”	◎	△
調査・分析の詳細な記述	△	◎

◎ 特に重要な要素 ○ 必要な要素

△ 場合によって求められる要素

に、質的研究の性質や特長を考慮したものであることが必要である。質的研究の「質」を評価する基準としてこれまでさまざまな criteria が発表されてきた^{22~27)}。しかし、これらの criteria は質的研究が持っているさまざまな背景を十分考慮しているとはいえず、評価基準を個々の研究にうまく適応できない場合がある。そこで、表2のようにマクロ・ミクロの分類に基づいて研究プロセスの評価基準を整理することを提案したい。そうすることによって各研究の性質にそった一連の研究プロセスの評価が可能となり、これまで発表されてきた基準をより実際的に運用することができる。

一方、行われた質的研究の「質」を評価する場合、実際には報告書等の書面を通じて行わざるを得ない。報告書は通常、学会誌などへの投稿論文であることが多く、限られた紙面と掲載の書式にのっとった記述が求められる。したがって、こうした制限を前提に説明可能性の高い報告をするためにはその質的研究のプロセスの厳密性と妥当性を主張しうる要点を明確かつ簡潔に記述する必要がある²⁸⁾。そして、前述したような質的研究のプロセスの評価基準を参考にしながら、評価に耐えうる必要最小限の情報を報告するように努力しなければならない(表3)。

最後に、査読者の基準や合理的な査読のあり方を整備することも重要であろう。質的研究は報告論文の査読においても人の主観が強く影響し、査読者の価値観や嗜好によって恣意的な査読がなされる危険性がある。したがって、査読者の記名による査読を行ったり、表2のような調査手続きの

表2 質的研究のプロセスの評価基準

共通	総合	<ul style="list-style-type: none"> ●記述が明解である ●研究の目的や方向性が明確であり、デザインに矛盾がない ●倫理的な配慮がなされている
	調査	<ul style="list-style-type: none"> ●参加者の基準や募集の方法が研究の目的にふさわしい ●データの収集方法の概要が提示されている ●プロセスに一貫性がある
	分析	<ul style="list-style-type: none"> ●分析方法の概要が明解に示されている ●特に質的データの処理をどのように行ったかを示している
	考察	<ul style="list-style-type: none"> ●分析結果と考察の間に論理的な飛躍がない ●収集したデータの信憑性に関する評価を試みている
マクロ		<ul style="list-style-type: none"> ●研究者と対象者との関係が研究に悪影響をおよぼしていない ●複数の分析者間によるディスカッションが合理的に行われている ●結果を裏付けたり・否定するエビデンスを検討している
		<ul style="list-style-type: none"> ●member checking や follow-up questionnaire などを試みている ●結果に実用性があり、現場での適応に耐える内容である
ミクロ		<ul style="list-style-type: none"> ●研究に関連する研究者の立場（価値観）を表明している ●研究の主題をそれずにデータを収集・分析している
		<ul style="list-style-type: none"> ●質的データやその収集プロセスを詳細に記述・考察している

評価基準を参考に査読のためのチェックシートを作成してその結果を執筆者にフィードバックすること、さらには、審査の概要を執筆者に通知したり、査読結果への執筆者の異議の申し立てとそれに対する査読者の回答を公開するなどによって、透明性と責任性の高い査読を行うべきである。

また、質的研究には特異な概念や理論的背景があり、質的研究の「質」の評価にあたってはこれらを十分理解している必要がある^{29,30)}。したがって、査読者は質的研究に関する知識と経験が豊富な研究者を選考し、質的研究特有の概念や背景に則した査読が行われなければならない。こうすることによって、公平性・公正性を保ち、執筆者に対する説明責任をはたしうる査読が可能となり、主観性を排除できない質的研究の査読の「質」を高めることができると思われる（表4）。

表3 質的研究の報告事項

1. 緒言	<ul style="list-style-type: none"> ●研究の目的（方向性）、質的研究を用いた理由
2. 研究方法	<ul style="list-style-type: none"> ●調査対象者の基準とその理由 ●リクルート方法および調査手続きの概要 ●質問内容あるいは質問の枠組み ●倫理的配慮
3. 分析方法	<ul style="list-style-type: none"> ●分析プロセスの概要（もちいる質的データの種類） ●妥当性を高めるための工夫
4. 調査結果	<ul style="list-style-type: none"> ●参加者の属性 ●主な分析作業の結果
5. 考察	<ul style="list-style-type: none"> ●参加者やサンプリングの妥当性、データの確からしさ ●調査結果に関する考察 ●先行研究との比較（とくに negative case との関連） ●限界と問題

表4 質的研究の査読のあり方

●査読者の実名を明記した査読を行う
●「チェックシート」による査読結果を執筆者にフィードバックする
●審査の経過を執筆者に通知する
●査読結果への執筆者の異議申し立てとそれに対する回答を公開する
●査読者には質的研究の知識と経験を有する研究者をあてる

Ⅳ ま と め

質的研究では人の主観が利用されるが、同時に、主観がその「質」を歪める危険性がある。したがって、いかにして厳密なプロセスを実現し、いかにしてその妥当性を主張しうる報告を実現するかが重要である。そのためにはそれぞれの研究にふさわしいデザインができるよう、現在の混乱した質的研究の概念を整理することが必要である。筆者は、質的研究のプロセスを考える際に探索型研究および明確化研究という分類を、また、厳密性のあり方を考える際にマクロ・ミクロの分類を有用な概念として提案した。そして、これらを質的研究をデザインする際の指標にしながら厳密なプロセスと説明可能性の高い報告を目指すべきである。また、報告書を通じて研究の「質」を

評価するためには、質的研究の実情にあった criteria を整備し、査読者の基準や査読の合理的プロセスを通じて査読の公平性・公正性を確保する工夫も必要であろう。公衆衛生分野では質的研究の適用にふさわしい研究課題も多く³⁾、今後、報告される質的研究が増加することが予想される。したがって、本学会レベルでも質的研究の質に関わる課題にコンセンサスを形成しておくことが肝要であり、今回の提言や主張を通じて質的研究の概念や方法論に対する意識が高まりさらなる具体的議論につながることを期待したい。

(受付 2002.12.20)
(採用 2003. 3.24)

文 献

- 1) Baum F. Researching public health: behind the qualitative-quantitative methodological debate. *Soc Sci Med.* 1995; 40(4): 459-468.
- 2) Patton MQ. *Qualitative research & evaluation methods* (3rd ed). Calif: SAGE, 2002; 3-29.
- 3) Faltermaier T. Why public health research needs qualitative approaches. *European journal of public health* 1997; 7: 357-363.
- 4) 瀬島克之, 杉澤廉晴, 大滝純司, 他. 質的研究の背景と課題—研究手法としての妥当性をめぐって—. *日本公衛誌* 2001; 48: 339-343.
- 5) 瀬島克之, 杉澤廉晴. 公衆衛生分野における質的研究のあり方. *日本公衛誌* 2002; 49: 1025-1029.
- 6) Schwandt TA. *Dictionary of qualitative inquiry* (2nd ed). Calif: SAGE, 2001.
- 7) Rice PL, Ezzy D. *Qualitative research methods—a health focus—*. Victoria: Oxford university press, 1999.
- 8) Creswell JW. *Research design—Qualitative & quantitative approaches— choosing among five traditions*. Calif: SAGE, 1994; 47-72.
- 9) Green L, Kreuter M. *Health promotion planning—An educational and ecological approach—*(3rd ed). Calif: Mayfield publishing company, 1999.
- 10) 中村譲治. 社会診断の実際—Quality of lifeの事前評価—. 藤内修二 編. PRECEDE-PROCEED Model (MIDORI モデル) の理論と実践. —平成11年度厚生科学研究費補助金 総合的な地域保健サービスの提供体制に関する研究報告書 2000.
- 11) Bandura A. *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. Englewood cliffs, NJ: Prentice hall, 1986.
- 12) 木下朋子, 中村正和, 近本洋介, 他. 医療機関における禁煙サポートのあり方に関する研究 看護婦を対象としたフォーカスグループインタビュー調査結果から. *日本公衛誌* 2002; 49: 41-50.
- 13) Morse JM (ed). *Critical issues in qualitative research methods*. Calif: SAGE, 1994.
- 14) Holman HR. *Qualitative inquiry in medical research*. *J. Clin. Epidemiology* 1993; 46: 29-36.
- 15) Whittemore R, Chase SK, Mandle CL. *Validity in qualitative research*. *Qualitative health research* 2001; 11: 522-537.
- 16) Holloway I, Wheeler S. *Qualitative research for nurses*. London: Blackwell Science, 1996; 162-170.
- 17) Grbich C. *Qualitative research in health—An introduction*. Calif: SAGE, 1999; 58-80.
- 18) Seal C, Silverman D. *Ensuring rigor in qualitative research*. *European journal of public health* 1997; 7: 379-384.
- 19) 瀬島克之, 阪本尚正. プロセスとしての質的分析の妥当性に関する検討. *理論疫学研究* 2002; 34: 19-29.
- 20) Sandelowski M. *Rigor or rigor morits: The problem of rigor in qualitative research revisited*. *Adv Nurs Sci* 1993; 16: 1-8.
- 21) Morse JM, Barrett M, Mayan M, et al. *Verification strategies for establishing reliability and validity in qualitative research*. *International journal of Qualitative methods* 2002; 1(2), Article 2.
- 22) Seale C. *The quality of qualitative research*. Calif: SAGE, 1999; 189-192.
- 23) Shmerling A, Asatner P, Piterman L. *Qualitative research in medical practice*. *The medical journal of Australia* 1993; 158: 619-622.
- 24) Elder NC, Mill WL. *Reading and evaluating qualitative research studies*. *The journal of family practice* 1995; 41: 279-285.
- 25) Reid A. *What we want: Qualitative research*. *Canadian family physician* 1996; 42: 387-389.
- 26) Pose RM, Isem AM. *Qualitative research in medicine and health care*. *JGIM* 1998; 13: 32-38.
- 27) Giacomini MK, Cook DJ. *User's guides to the medical literature. Qualitative research in health care A. Are the results of the study valid?. JAMA* 2000; 284: 357-362.
- 28) Andrews M, Lyne P, Riley E. *Validity in qualitative health care research: An exploration of the impact of individual researcher perspectives within collaborative enquiry*. *J adv nurs* 1996; 23: 441-447.
- 29) Morse JM. *Qualitative research methods for health professionals*(2nd ed). Calif: SAGE, 1995; 1-20.
- 30) Patton MQ. *Enhancing the quality and credibility qualitative analysis*. *health services research* 1999; 34(5): 1189-1208.